

かわひがしへきごとう

河東碧梧桐の句碑

端村の銚子ノ口に俳人河東碧梧桐の句碑があります。自然石の岩壁に彫られており、できてから70年以上経っているため風化が進んでいますが、近づいてよく見ると、次の句が刻まれていることがわかります。

阿賀川を下る

出水跡も岩立ちて 紅葉遅うしめ 碧

河東碧梧桐(1873～1937)は愛媛県松山市の生まれで、15歳のとき、正岡子規から野球を教わったことがきっかけとなり、同級生の高浜虚子とともに子規から俳句を学びました。のちに従来の五七五の形にとらわれない自由律の俳句を作るようになります。

この句は1906年(明治39)に詠まれたものです。この頃、碧梧桐は自由律の俳句の宣伝のため全国を旅し、俳句を作っていますが、会津若松から喜多方、熱塩、阿賀川沿いに野沢、上野尻、徳沢を通って津川に行く際、銚子ノ口にも立ち寄り、この句を詠んだのではないかと思います。

また、この句碑は1953年(昭和28)に作られますが、斎藤龍多郎が持っていた半折(書道用紙を縦半分に切ったもの)に書かれた文字を拡大して、自然石の岩壁に彫られました。



▲河東碧梧桐の句碑



龍多郎は学校の校長などを務めたのち、戦前と戦後に2度、野沢町長に就任しています。戦後の就任は民選第1号の町長となりました。また、俳句に親しみ、「珂星」の俳号でも知られ、1937年(昭和12)に設立した笹の実俳句会の主宰でもありました。

碧梧桐が銚子ノ口を訪ねた頃、龍多郎は会津中学校(今の県立会津高等学校)の生徒で、吟詠部に所属し、俳句をたしなんでいました。碧梧桐の来遊に刺激された龍多郎は吟詠部内に仏掌薯会という俳句会を作っています。

なお、この句碑のもとになった碧梧桐自筆の俳句は、今でも龍多郎の子孫の家で大切に保管されています。

◀当時のようす「西会津歴史物語」より

編集後記

(9ページに関連記事)



今月は、5月3日に行われた福島レッドホープス公式戦から、ゴールデンウィーク中ということもあり、多くの観客で会場は盛り上がっていました。始球式とプレイボールの宣言を務めた会津西BCの児童たちは福島レッドホープスの選手から受け取ったサインボールを大切に手にしていました。

今月の表紙

取材で町を回っていると、藤の花を多く見かけました。藤には「歓迎」「優しさ」といった花言葉があるそうです。移住者の方を歓迎する町の支援体制や町民の皆さんの優しい人柄にもつながっているなど感じました。

(伊藤)